

観峰流書錬部

編集 観峰流書道宗家 制作・発行 有限会社 観峰文化センター 京都市左京区岡崎南御所町40-20
発行日 平成19年11月1日 ©観峰文化センター 掲載内容の無断転載を禁ず

六朝体書風 1

鑑賞

方筆系と円筆系

文字に筆力を与える気骨ある六朝体書風の骨法は、観峰流の中にも継承されていると想像できます。六朝体の文字には、現代では用いられない異体字がたくさん含まれています。また直線的できびしい表情をもつ方筆系文字と素朴、雄大であたたかい円筆系文字の二つの用筆の傾向は六朝体の特徴を示しています。この二つの性格は、今後の楷書作品に取り組み際の創造性と表現性を高める要素となります。裏表紙に方筆と円筆両方の臨書作品を挙げました。よく比較研究してください。

左の作品は古典の臨書作品とは違い、観峰宗師の自運による六朝体書風の作品です。鑑賞の目を養って自運につなげていきましょう。



DVD教材 左の条幅作品の一字一字の拡大画像（静止画）を参照して細部の用筆を研究してください。

観峰書 道在無言天自顯 年高有世徳咸親



道は無言に在るも天自ら顯る 年高く世に有る徳咸親しむ

楷書体の変遷を書道史の上からみると、漢代と唐代の間にあたる南北朝時代は、書体発生の源流として重要な時代です。楷書の書風を大きく二つの系統に分けるとすれば、一つは南朝の王羲之、王献之の二王（東晋）とその流れを受け継いだ初唐の虞世南、欧陽詢、褚遂良の法帖に代表される晋唐の典麗な楷書です。もう一つは北朝の北魏の碑や摩崖、造像記に代表される石刻の質朴剛健な楷書です。この変化に富んだ野性味のある書風を特に六朝体と呼んでいます。この二つの傾向を古くから「南帖北碑」と呼んで、南北朝の対照的な書美を鑑賞してきました。観峰流の楷書の源流には、この二つの書風が混ざり合い、影響しあった書法が流れているように思われます。

日本では六朝体書風は、明治十三年頃清国から来朝した楊守敬によって、その頃の能筆家、巖谷一六、松田雪柯、日下部鳴鶴に伝えられ、明治の書風に一大変化をもたらすことになりました。また中林梧竹は清国に渡り、帰国後は六朝派の書風を伝え、その後この六朝派の書が日本でも普及するに至りました。徳川末期までの書風は尊円親王から出た御家流が全盛だったのが、明治になると、正式な文書は唐様で書かれるようになり、その唐様書風の上に変化剤として六朝体書風が入ってきたのです。

張猛龍碑

今回は方筆系の学習です。筆者不明とはいえ、北魏楷書の中で特に地位が高いとされている張猛龍碑の字形、運筆をみてみましょう。晋唐の楷書で代表的な九成宮醴泉銘と比較してみると、字形の面でも、より変化に富んだバランスのとり方がみられ、点画に筆勢が強く感じられます。また運筆の速さ、打ち込みの角度、転折や払いにも特徴がみられます。この用筆の変化は、作品に趣と深さを与えることによって、重くなりすぎたり、スピード感を失ったり、単調平面になることをおさえることができます。

張猛龍碑が建てられたのは、龍門造像記や鄭文公碑が刻されてから二十数年後の五二二年。現在、方筆系楷書の頂点として広く学ばれています。この碑は、仏教が盛行していた世で孔孟の学を深く信じて儒教を述べた、張猛龍の

功績を永く記念するために建立されました。作者と筆者は明かされておらず、張猛龍という人物もこの碑以外の歴史上には現れていませんが、人徳の高い人だったと想像されています。現在、碑は山東省曲阜の孔子廟の中に保存されています。

六朝体書風のように剛健な書風を学ぶ上で、執筆法は必要不可欠なものといえます。中国には古くから伝わる「撥鐙法」という執筆法があり、六朝体書風が楊守敬によって日本にもたらされた時、文字を書く上での執筆法の重要性とともに日本に伝えられました。そして、日下部鳴鶴らによって「回腕法」などの法が生み出され、今日に語り継がれています。私達がいま使用している執筆法は、観峰宗師が書を極めていく中で「撥鐙法」や「回腕法」などを経て生み出された四指斉頭法ししせきせいとうぽうを使用しています。四指を揃えて筆にかけるこの法は、筆に最も力を入れて筆力を出すことができるので、六朝体書風のように力強い書を書くのに適しているといえます。

半紙書きの場合は兼毫筆で書くことが多いですが、作品書きでは羊毛筆を使用して力強い中にも豊潤な味わいを表現してみましょう。今回は、臨書教本「張猛龍碑」を紹介します。他の観峰宗師の書き遺された六朝体の参考図書（10頁11頁参照）も錬成し、六朝体書風を自身の書力にして自運への道のステップにしましょう。



臨書課題

（本課題は、手本学習からさらに臨書学習へ進むための課題です。）

拓本と観峰宗師の臨書課題手本を比較・参考にして、「張猛龍碑」臨書三課題を無罫半紙に臨書する。

〈臨書課題提出規定〉

- ・三課題のうちから一課題を選んで提出する。
- ・提出用紙および枚数 無罫半紙（縦35 cm×横26 cm内）一枚。用紙の種別は問わない。
- ・落款、落款印は入れない。
- ・錬成連絡表 今回の臨書課題で学習したこと、苦心したところなどを通信欄に書いて提出。
- ・書美研究講座提出票 提出用紙の左端下に貼って提出。

南陽白水人也

南陽白水人也

「南」「白」転折は鋭角を意識する。

「水」「人」左払いに鋭さと重みをもたせるために側筆で、鋒先の位置と筆圧に注意して
運筆する。

「人」「也」懐かみこの大きい、豊かな文字を表現するために、文字の中に空間をもたせる。



三井記念美術館蔵

其 瓜

氏 興

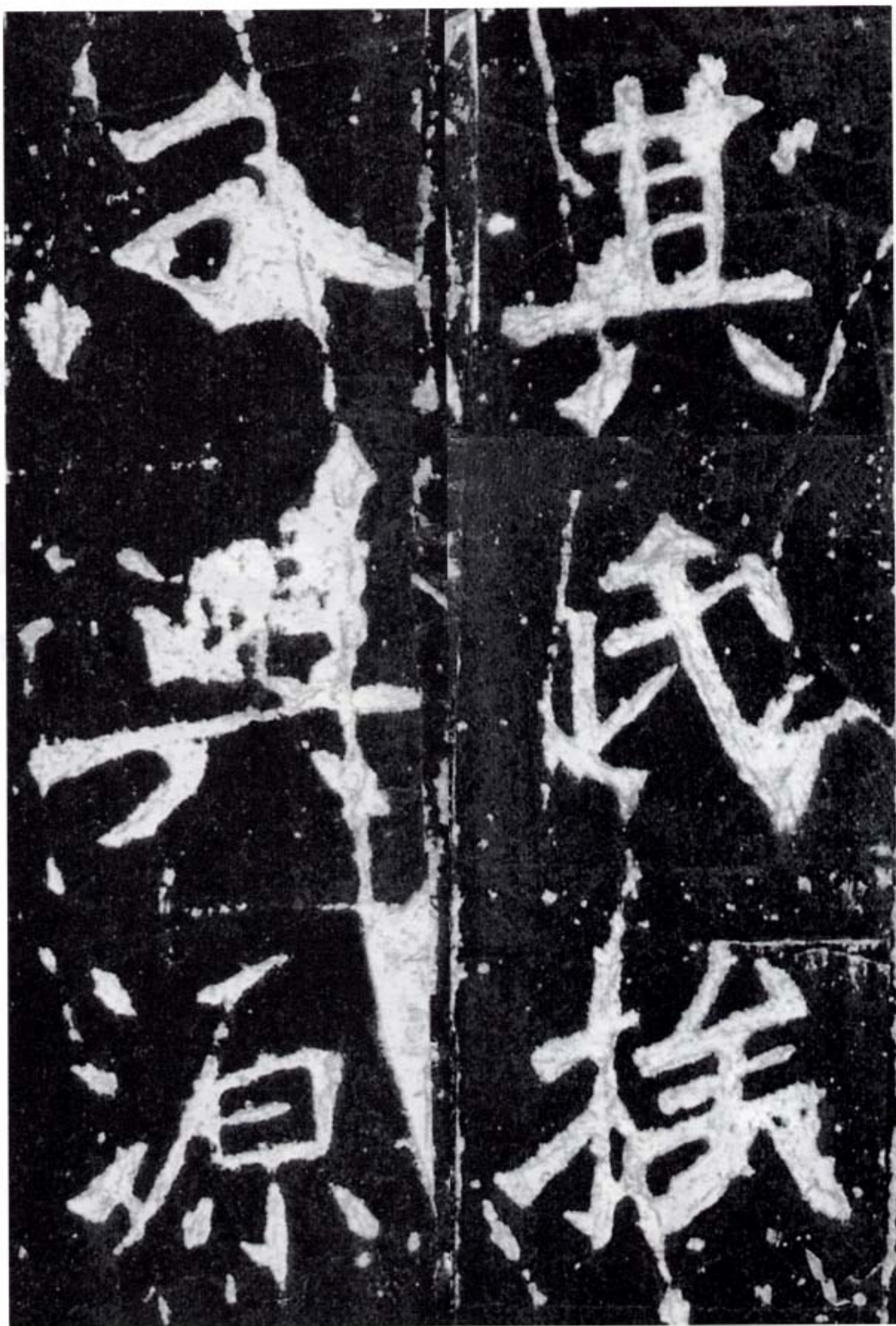
族 源

其氏族分興源

「其」左側の点は下から上にはねあげる。

「源」の右側の点は押さえてから右下にぬくようにする。

「其」「興」横画は極端に長く、動きがある。始筆は深い角度で強く打ち込んでいる。



流 故

流所出故已備

所 已
出 備

「流」「つくり」を大きくして、強さと不調和の美を表している。

「流」「故」右払いは側筆で鋒先の位置に留意して、鋭くなりすぎず重みをもたせる。

「所」文字の左側の空間を広くとって、変化をもたせている。横画は打ち込みを深く鋭くする。



六朝体書風・方筆系臨書教本

六朝体書範

馬鳴寺根法師碑

牛楸造像記



孫秋生造像記

始平公造像記



『六朝体書範』

商品番号 6312

『馬鳴寺根法師碑』

商品番号 6320

『牛楸造像記』

商品番号 6453

六朝体の中から「始平公造像記」「孫秋生造像記」「鄭文公下碑」をとり上げて、観峰宗師が臨書されたものです。六朝体の楷書は唐時代の楷書とは一味違い、野生的で力強い用筆法が魅力です。方筆系文字は、特に始筆終筆の角度や形に特徴がみられます。「始平公造像記」と「孫秋生造像記」それぞれの魅力を、観峰宗師の臨書から学びとることができます。

張猛龍碑（五二二年）とはほぼ同時期に建てられた石碑といわれています。やや横広の字形で、鋭い「始筆」や「転折」、重量感のある「ハネ」や「はらい」は龍門造像記や張猛龍碑に通ずるものを感じます。この石碑は、現在では三つに断裂し、文字の損傷も著しく不鮮明な部分が多く、特徴がつかみにくい。ため、観峰宗師の臨書から学ぶとよいでしょう。

牛楸造像記は龍門二十品のうちのひとつです。母が亡き息子牛楸の冥福を願って建てたもので、息子が迷いの世界から解き放たれるようにと母親の切なる思いが込められています。この教本は、牛楸造像記の特徴を踏まえながら解りやすく臨書されたものです。原拓の全文が臨書されており、碑文の読み方も記載されています。

六朝体書風・方筆系臨書教本

魏靈藏造像記

孫秋生造像記

竜門造像書範

敢家射

祖吳景

安惡以

『魏靈藏造像記』

商品番号 5996

『孫秋生造像記』

商品番号 5800

『竜門造像書範』

商品番号 5864

この造像記は魏靈藏と薛法紹の二人で造られました。碑文は、仏教の経緯からは始まり、必然的に釈迦が施した功績や、仏教とは世に稀にみる教えであることを述べ、仏になるために全ての家財を尽くして造像し、後世に伝わるようにという祈願が込められています。龍門四品の一つとして称されており、横画の終筆部に筆をはね上げる隷書に似た形がみられるのが特徴です。

孫秋生造像記は龍門四品の一つとして挙げられています。碑文には、仏教や国の発展を願う思いが込められ、造像に関わった百三十数名の名も刻まれています。四八三年から二十数年もの年月をかけて造りあげられました。この教本は「点」「画」「転折」「ハネ」「はらい」「字形」などそれぞれの特徴ごとに、その特徴が共通する文字を一頁に集めて書かれたものです。

龍門四品の一つとして称されている「始平公造像記」「魏靈藏造像記」「孫秋生造像記」と「牛橛造像記」の四つの特徴を、観峰宗師が総括して書かれた六朝体書風のお手本です。四十六頁にわたり五十音順に書かれてあるので、六朝体楷書の方筆系代表である龍門造像記の文字を効果的に学ぶことができます。

張猛龍碑 觀峰節臨 春秋嘉其聲績漢初趙景王張耳浮沈

春秋嘉其聲績漢初
趙景王張耳浮沈

張猛龍碑節臨 觀峰



魏故中書監使持節

晉諸軍事安東將

鄭文公碑 觀峰節臨



鄭道昭 鄭文公碑 觀峰節臨 魏故中書監使持節晉諸軍事安東將



一字一字の拡大画像（静止画）を参照して細部の用筆を研究してください。